# 西行の恋の題詠歌・続

渡部泰明

『山家集』中巻の恋部の冒頭に、陽明文庫本で数えて三十八首ほどの、題詠とおぼしき恋歌が収められている。およそ秀歌と呼ばれぬそれらは、論の対象となることもまた乏しかった。けれども題詠と考えることで、西行が題を始発としてどのように歌を発想していったか、その経緯を垣間見させる。ここでは、「夢会恋」題の四首について考察する。

## 一

夢会恋

なか〳〵に夢にうれしきあふことはうつゝに物をおもふなりけり（五八一）

あふことを夢也けりと思わく心の今朝はうらめしきかな

あふとみることをかぎれる夢ぢにてさむる別のなからましかば（五八二）

夢とのみおもひなさるゝうつゝこそあひみしことのかひなかりけり（五八三）

実は陽明文庫本には三首しかない。四首あるというのは流布本である版本系統の本文で、二首目の「あふことを」はその版本から補ったものである。

一首目「なか〳〵に」（五八一）から見ていこう。そもそも「夢会恋」（「夢中会恋」も同趣旨と見なす）とは、西行前後の時代からしばしば見られるようになる複合題である。とすれば、この題での詠みぶりは、西行が同時代の表現の水準からどう抜け出ようとしたかを物語るはずである。

夢中会恋といふことをよめる　　平忠度朝臣

夢さめてなごりにたへず成りゆくはあふとみつるにかへんいのちか（月詣集・恋下・五五八、忠度集・七七）

夢会恋

夜とともにかへしてきつるから衣いくよといふにしるしみつらん（清輔集・二六三）

内裏三首会、夢会恋と云ふことを

はるの夜のゆめには人にあふとみついまはうつつにまさしからなん（教長集・七七二）

夢逢恋

おどろかすとりのねばかりうつつにてあふとみつるはゆめにぞありける（経正集・八七）

忠度・教長・経正の歌は、逢瀬の夢を見て、そこから醒めた名残惜しさ・口惜しさを詠んでいる。その点で、西行歌よりはよほど余情的である。西行五八一番歌は、「夢」と「うつつ」を、「うれし」「物を思ふ」と対照的に捉えている点にかえって説明的なものを感じる。同じように夢・うつつを対照させてはいても、教長・経正の歌の方が、うつつの頼みがたさを滲ませていて哀感がある。おそらく西行の意図としては、

逢ふことは夢の中にもうれしくて寝覚めの恋ぞわびしかりける（拾遺集・恋四・九二一・読人不知）

の一首と同様の心情を詠もうとしたのであろう。その際、出家前に仕えた藤原実能の、

夢にだに逢ふとは見えよさもこそはうつつにつらき心なりとも（金葉集・恋上・三六五・実能）

の言葉使いなどを参考にしたのではなかったか。実能歌は夢に期待をかけるという内容だが、では夢に見たとしたら満足するのか、と発想してみたかのようである。

さてこれらの例歌と比較してみたとき、やはり際立つのは、西行の「物を思ふ」ことへのこだわりである。しかもその原因が逢瀬を夢に見た嬉しさにあるという。『拾遺集』歌「逢ふことは」もそうであるとはいえ、そこでは「嬉しさ」と「わびし」さはもっと浸透し合っている。後朝の別れに似た情趣であることもその一因であろう。対して、西行の歌では夢とうつつはもっと対立的である。嬉しく思った心の、正反対のものへの変化、というあやにくさに主眼がある。西行は、わが心が大きく転回すること、そうした心の変貌にこだわるのである。

## 二

次に、この歌群の最後の歌、

夢とのみおもひなさるゝうつゝこそあひみしことのかひなかりけり（五八三）

を見てみたい。第二句の「思ひなさるる」に若干の問題がある。「るる」は自発の助動詞と考えるが、受身の助動詞と取れないこともない。なにより西行自身に受身の例があるからである。

おやにおくれてなげきける人を、五十日すぐるまでとはざりければ、とふべき人のとはぬ事をあやしみて、人にたづぬときき て、かくおもひていままで申さざりつるよし申してつかはしける人にかはりて

なべてみな君がなげきをとふかずにおもひなされぬことのはもがな（山家集・八〇二）

しかしこの例は代作でもあり、相手に向けて自己弁護するという特殊な状況なのでもあって、五八三番のそれはやはり自発の用法と見るのが自然である。「思ひなさるる」は、そのようにしか思えない、ということであろう。諸注の解するように、現実に逢ったというのに、夢としか思えないというのでは、逢った甲斐がないではないか、という意味になる。

だとすると、少々気になることがある。現実に逢ったということならば、「夢会恋」の題意から逸れてしまうことである。前掲の、時代の近接する同題の諸例と比較すれば、そのことは明らかだろう。それだけではない。おそらく西行は、

むばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり（古今集・恋三・六四七・読人不知）

といった趣をさらに推し進めようとしたのであろうが、せっかくの逢瀬を「甲斐がない」とまでいうのでは、恋歌として行き過ぎを咎められかねない。けだし一首は、逸脱や逆説をあえて弄して読み手（まずはその題での詠み手でもある）を煙に巻くかのような、諧謔を含んでいるのであろう。この題詠の歌群に、読み手の意表を突こうとする諧謔的な物言いが頻出することは、前稿でも述べた。そしてまた、諧謔を支える発想の仕方にも注意したい。現実の逢瀬をまるごと夢にしてしまうような、自分でもどうにもならない「思ひなさるる」心の働きの言挙げである。それもまた、心の転回へのこだわりということができるだろう。

## 三

あふことを夢也けりと思わく心のけさはうらめしきかな

二首目のこの歌は、先にも述べたように、陽明文庫本系統にも松屋本系統にも見られず、版本系統にのみ存する歌である。原型に増補されたものと見るのが自然であろう。この題のもとに増補された理由を想像することはさほど困難ではない。前節で取り上げた五八三番歌とよく似た趣意だからである。ただしこちらは実際に

逢ったのではなく、夢の中での逢瀬であろう。「思ひわく」という心の働きによって、夢見心地が恨めしさに変わる。やはり、転回する心のあり方に主眼がある。しかも、本来恨めしいという言葉を用いるのは、恋の相手であるはずである。心が他者化され、ままならないものとして強調されている。そこはかとないユーモラスな気分もそこには漂うであろう。

最後に三首目の、

あふとみることをかぎれる夢ぢにてさむる別のなからましかば（五八二）

を取り上げよう。和歌文学大系『山家集・聞書集・残集』は、

歌林苑、人々方を分かちて、歌をえらびて歌合し侍りしに、

恋歌三首

思ひきや夢をこの世の契にてさむる別をなげくべしとは（林葉集・六八〇）

の一首を挙げ、これに依る、と注する。厳密には両首の先後は不明というべきだろうが、たしかによく似ていて、影響関係を想定したくなる。この指摘に従って両首を比べてみると、「夢をこの世の契にて」の言葉運びなど、「契」に縁と交情の両義を含ませる巧みさを見せて、ずっと俊恵の歌の方が洗練されていることに気づく。一方西行の方は、「逢ふと見ることを限れる夢路」と「覚むる別れ」との断絶が表立てられていて、生硬である。だからこそ、むしろそこに西行の意図を見たい。西行歌は、逢った時点で夢が終わって覚めないでほしかった、という。しかし夢が終わることとは目覚めることにほかならない。まるで永久に夢の中にとどまっていたい、と言っているかに見える。それは、

あふとみしそのよの夢のさめであれなながきねぶりはうかるべけれど（山家集・一三五〇）

という、西行自身の「恋百十首」の末尾の歌に通じる心情である。こうした凄みさえ感じさせる西行独特の世界につながるのである。夢にどっぷりと浸りこむことと、そこから覚醒すること、その両者へのこだわり。ここにも心の転回への西行の執着が見られるのである。

注＊　このことについては、拙稿「西行の恋の題詠歌」（『西行学』七、二〇一六・八）で論じた。参考文献等は同論文によられたい。なお、『山家集』の本文は、寺澤行忠『山家集の校本と研究』（笠間書院、一一九三）による。